

- 1 ちよつとした仕草がすべて雪遊び
- 2 見せたいな雪が星座になるところ
- 3 返り花日差しにほつとしてゐたる
- 4 河豚の死に酸素を送る生簀かな
- 5 夕焚火来る人来る人みな黙る
- 6 落ち葉踏むガードレールを乗り越えて
- 7 マフラーで運ぶ缶コーヒー五本
- 8 動かない鴨を見てゐて動かない
- 9 馬小屋で糞すれば湯気クリスマス
- 10 寒の夜かりりと薄きチョコレート
- 11 もらひたるマフラー巻いたまま眠る
- 12 手袋にやさしい闇が五つある
- 13 重ね着の一部をコインロッカーに
- 14 正月や僕にも親がゐる不思議
- 15 読初の歌麿(うたまろ) 頁を破りさう
- 16 瞬き(まばたき)のできぬマネキン三が日
- 17 座布団の下で破魔矢が折れてゐた
- 18 七草に時間のごとき塩をふる
- 19 足元のヒーターてきぱきレジを打つ
- 20 陽のあたる場所に手袋忘れある
- 21 白息でパンク修理を覗き込む
- 22 雪下ろし見てゐる梯子を握りしめ
- 23 暖房をつけっぱなしで引き取りに
- 24 要人が来てゐるときの静電気
- 25 リムジンの曲がれぬ垣根落葉焚き

- 26 いま我はただのコンニャク湯冷めして
27 吸殻(すひがら)を雪に埋めつつ救助待つ
28 火を入るときに声かくおでん鍋
29 髭面(ひげづら)の愛嬌ぬつとおでん屋に
30 咳き(しはぶき)に片眉上がる試験官
31 目が合はぬ自分の顔や受験票
32 輝(あかぎれ)の手がぐしやぐしやの札(さつ)握る
33 雪女郎骨の隙間に指入れて
34 眠たさが満ち満ちてゐる暖房車
35 三寒四温地球が照れてゐる
36 如月の短さ恋文書き直し
37 湯煙は常に流れて寒桜
38 春立つや服に醤油の染み残る
39 然(さ)る方に尋ねてみれば臥竜梅
40 農具市今夜は俺が奢る番(おごるばん)
41 犬の目に巨大な人や石鹼玉(しゃぼんだま)
42 陽春の混沌として子供部屋
43 もう一度キスしてダイヤ改訂期
44 卒業歌くすぐつたくて反抗す
45 浅蜷汁ペリーは怖い人だった
46 春の闇金庫の上に猫がゐる
47 問診に嘘少し混ぜ春の昼
48 病室の短き会話月朧
49 穴あけて開く蜬のパックかな
50 キッチンの小さな時計春の雷

- 51 キヤプションが「アスパラガスの最盛期」
- 52 おにぎりの具までが遠き春野かな
- 53 見送りしあとの余白を花流れ
- 54 ぶらんこを見て欲しくつて雨の日も
- 55 俯いてゐたなあ入学式の僕
- 56 竿先のつつと花びら押し返す
- 57 さすられてさみしき患部落花来る
- 58 満開はどこを撮つても薄濁る
- 59 ぼかぼかもぼかぼかも春長ける (たける) 音
- 60 黒髪を海に溶かして海女沈む
- 61 本棚の裏で縮んでゐる風船
- 62 あたつても死なない桜蕊の降る
- 63 郭公が音声案内通り鳴く
- 64 神々の多情多淫や五月来る
- 65 梅雨に病むベッドの上の散らかつて
- 66 父の日の雨に打たれて馬走る
- 67 新緑や船頭に聞く出身地
- 68 観光地的な値段の生ビール
- 69 光るもの蛍と決めて酔うて寝る
- 70 濡れてゐるホームの端や手毬花
- 71 夏至の日の酒にサソリが漬けてある
- 72 社に戻るソフトクリーム髭につけ
- 73 噴水の前を動かぬバスガイド
- 74 腰に手を回し合ひたるまま昼寝
- 75 十年間変はらぬ冷蔵庫の上は

- 76 籐椅子や然る（しかる）重さの全句集
- 77 かき氷たぶん虫歯が二本ある
- 78 昼寝覚猫が肛門見せにくる
- 79 手花火やころろ変はる好きなる人
- 80 ただ量を減らしただけの夏料理
- 81 弁当が売り切れるまで炎天に
- 82 血管は川よりも山楸邨忌
- 83 夕立やクロワッサンのぼろぼろと
- 84 ナイターのつけてはすぐに消す点差
- 85 満塁で一本出ない暑さかな
- 86 かなぶんの愚直さが欲し母の前
- 87 踝（くるぶし）に蟻のチクチクバスを待つ
- 88 一人目が割ってしまった西瓜割
- 89 流木に木の重さなき秋の風
- 90 内定を葡萄を含んだまま話す
- 91 同棲や月を見ながら風呂屋まで
- 92 手触りがそのまま梨の舌触り
- 93 早生蜜柑やたらと届く編集部
- 94 ぼつくりとよそはれてゐる栗御飯
- 95 新米と気付いてゐるが言ひ出さず
- 96 酔の物が苦手で残す菊の宿
- 97 秋風のやうなり飲み屋街の猫
- 98 塾の子の腹減るころや星月夜
- 99 秋驟雨机の中はみな眠り
- 100 セイタカアハダチサウ男の子は泣くな